

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(小学校)

都道府県名 山 口 県

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	周南市立富田東小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	5	3	3	4	3	3	2	23	31
児童数	130	113	107	127	99	101	2	679	

研究の概要

1. 研究主題

「確かな学力を育む学習活動の創造」
～効果的な指導方法の開発～

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

- ・ 1年生・全教科
学級編成の弾力化により4学級を5学級編成にし、学習面や生活面の指導をきめ細かく行う。
- ・ 3～6年生・算数における少人数学習
理解の状況に個人差が出やすい教科であり、児童一人一人の実態に応じた指導を工夫し展開していく。
- ・ 5・6年生・理科における少人数学習
選択学習單元において、児童の興味・関心に応じた指導を展開していく。
- ・ 6年生・国語、社会、算数、理科
4教科において教科担任制を取り入れ、担任の個性を生かしながら、中学校への移行をスムーズに行う。

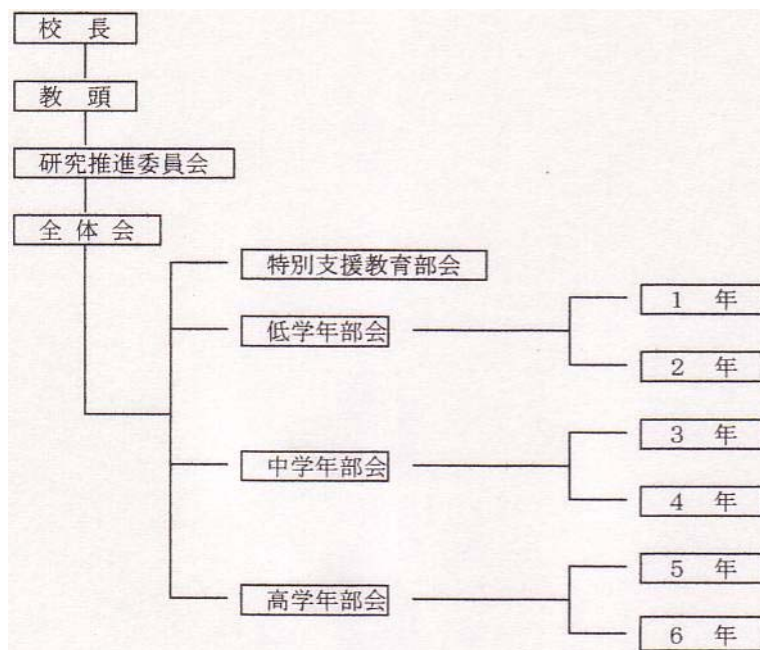
(2) 年次ごとの計画

平成 15 年 度	<p>テーマ きめ細かな指導を進めていくための効果的な指導方法の開発 研究の見通し 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 ～いろいろな学習形態の可能性を探る～ 研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学級編成の弾力化により、1年生4学級を5学級編成として指導を行う。 ・ 3～6年生の算数科において、主に1学級を2つに分けて少人数指導を行う。 ・ 5・6年生の理科の選択学習單元において、2人の教員が児童の個々の課題に応じて少人数指導を行う。 ・ 6年生の国語、社会、算数、理科において、教科担任制を行う。
--------------------	--

平成 16 年 度	<p>テーマ きめ細かな指導を進めていくための効果的な指導方法の改善 研究の見通し 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善と検証 研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1～6年生の算数科において、少人数指導を行う。 ・ 5・6年生の理科の選択学習單元において、2人の教員が児童の個々の課題に応じて少人数指導を行う。 ・ 6年生の国語、社会、算数、理科において、教科担任制を行う。
--------------------	---

(3) 研究推進体制

各学年部またはブロックを中心に研究を推進していく。少人数担当者は、それぞれの担当学年と連絡を取り合いながら研修を進める。



少人数指導における担当教員

3年	1、2、3組	各担任	少人数担当 A
4年	3、4組	各担任	
4年	1、2組	各担任	少人数担当 B
5年	1、2、3組	各担任	
6年	1、2、3組	教科担任	少人数担当 C

平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

(1) 1年生における学級編成の弾力化

1年生の学級増は、児童がお互いに交流しやすく、教師の側からしても、児童一人一人に目が行き届き、きめ細かな指導をすることができた。

(2) 算数科における少人数指導

本年度は、いろいろな視点から学習形態の可能性を探り、それぞれのよさや問題点を予測してみた。

学級を分けるか、分けないか

TTにするか、グループに分けるかの選択である。TTのよさとしては、

一人が全体指導をしながら、もう一人が気になる児童について「個に応じた」指導をすることができる。

練習問題をさせる時など、一人が机間支援をし、もう一人が丸付けをしたり次の課題を与えたりできる。

新たな学習場所を設定しなくても済む。(慣れた教室で学習ができる。)

移動しなくても済む。

学習の進度はクラス同一のため、理解が不十分な児童が出てくる可能性がある。作業中心になるような単元、復習的な単元の時に有効かもしれない。

誰が分けるか

ア 児童が分ける（選択する）

児童にアンケートをとり、希望によってグループを決定する。

児童の自主性が尊重され、意欲的に取り組むことが期待される。

人数のアンバランスが生じる可能性がある。

自己評価能力をしっかりと育てていかないと、安易に友達と同じコースを選択したり、自分の能力に合わないコースを選択したりしてしまう可能性がある。

イ 教師が分ける

教師が、児童の能力を判断し、それにふさわしいグループを編成する。

能力別に指導をしたいときには有効である。

人数の調整が可能である。

児童を分ける際に配慮を要する。（いつも同じメンバーにならないように、など）

児童が「分けられた」という感覚をもちやすい。（意欲がそがれる？）

ウ 保護者が分ける（選択する）

保護者が子どもと相談の上、コースを選択する。

保護者の意図は反映されやすい。

保護者の独断で選択される可能性があるかもしれない。

何を根拠に分けるか

ア 無作為2分割にする

出席番号を使ったり、席順を使ったりして、とにかく学級の人数を半分にする。簡単である。

不公平感が生じにくい。

単に人数が減っただけで、「個に応じた」指導は徹底できない。

イ 習熟度別で分ける

その単元の内容に対する児童の習熟度(理解度)によってグループを編成する。

「個に応じた」指導がしやすくなる。

発展的な内容や補充的な内容を扱いやすくなる。

児童の間で差別的な見方が生じないように十分配慮する必要がある。

ウ 課題別・学習方法別で分ける

同じ学習内容でも、課題が違ったり、学習方法が違ったりするグループを設定し、児童に選択させる。

児童の興味・関心に沿うことができ、意欲的に学習に取り組むことが予想される。

グループにより進度に違いが生じやすい。

授業のどの段階で分けるか

ア 単元の最初から分ける

イ 導入を一斉にしてその後分ける

ウ 最初は分けておいて最後に一斉に集める

エ 単元を越えて、ある一定期間グループを変えない

人数比をどのように分けるか

ア 少人数と多人数

少人数のグループでは、「個に応じた」指導がしっかりできる。

イ 半数ずつ

不公平感は生じにくい。

教師の意図、児童の要求に応じたグループ分けにはなりにくい。(強制的に半数にするようになるであろう)

誰がどちらのグループを受けもつか

グループ分けをした際に、どちらのグループを担当がもつか、というのも悩むであろう。児童との相性もあるかもしれないし、教職の経験年数から言ってベテランの先生がどちらをもつべきかということが問題になるかもしれない。

以上のようなことを考慮し、いくつかの要素を組み合わせながら、その単元においてふさわしい学習形態を模索していった。

学習形態	集団編成の具体的方法
習熟度別学習	1学級を習熟度や児童の希望に応じて2つに分けて指導を行う。人数は均等にならない。
二分割学習	1学級を座席や出席番号等により2つに分けて指導を行う。人数は均等になる。
均等二分割学習	1学級を学力がほぼ均等になるように2つに分ける。人数も均等になる。
方法別学習	1学級を課題解決の方法に応じていくつかのコースに分けて指導を行う。人数は均等にならない。
TT方式学習	1学級内に2人の教師がついてチームを組んで指導を行う。

算数科において、既習の学習内容の理解に差があるものやその単元そのものの内容がやや複雑で理解していくのに時間差が生じる可能性のある単元では、「習熟度別学習」が有効であった。できれば理解に時間のかかるグループの人数が少ないとより効果的である。しかし、厳密に習熟度別でグループ分けをしてしまうと、理解に時間がかかるグループでは児童相互の教え合い、高まり合いが見られないこともあった。教師が一方的に教え込むよりも、友達同士での学び合いの方が有効な場合もある。均等二分割学習のように学力を均等にしてしまうと習熟度別のよさは生まれてこないが、友達同士の学び合い、高め合いというよさを生み出すためには、教師の意図で授業を引っ張っていけるような児童をそれぞれのグループに配置する必要があると感じた。

習熟度別でグループ編成をした際に、児童の中で偏見が生じるのではないかと危惧したこともあったが、児童の様子を見る限りそれはあまり感じられなかった。いつも固定したグループ編成にならないように教師が配慮したこともあろうが、むしろ児童は少人数でじっくり学習することを望んでいるようでもある。

唯一4年生で、グループを固定(均等二分割)し一定期間授業を行ってみた。グループ内のメンバーが変わらないので、担当した教師からは児童の変容が把握しやすく、評価がしやすいという利点が報告された。しかし、学級担任からすると半数の児童の様子を直接把握できないという物足りない側面も伺えた。

(3) 理科における選択学習

理科の選択学習では、導入の大切さを痛感した。児童が最初にもった興味や疑問は、その後の学習活動の原動力となる。ここで、児童一人一人が自分なりの課題をしっかりと

りともてるかどうか授業の決め手である。しかし、最初の資料の与え方で、児童の興味や疑問がやや複雑で高度なものになってしまうと、その後の追求段階で児童の手に負えなくなってしまう状況も見られてくるので、課題設定段階での資料の与え方には留意しなくてはならない。

課題別に分かれてからの学習進度に不安があったが、随時双方のグループの進行状況や学習方法などについて児童相互が情報を交換する時間を随時設定することによって、互いの学習に生かされるようにしたため、それほどの差は生じなかった。

(4) 6年生における教科担任制

各担任が受けもつ教科の数は少なくなり、担任の個性が生かされたり教材研究が深まったりするなど、担任の負担は若干軽くなった。また、学年の全児童と接する機会が増え、生徒指導面での情報交換もしやすくなった。

反面、年度初めの日課を組む段階では、各担任の時間数や時間割の調整など相当な苦労があったし、日課変更をする場合などの調整が大変であったのも事実である。小学校では、学級担任が学習面・生活面で児童を把握し指導を行っていく面が強いが、教科担任制を導入すると、自分の担任する児童と接する時間が少なくなり、学級の児童の実態を把握しかねる部分も出てきた。それを補うために、各担任は情報交換を常に行いながら、それぞれの担任する児童の様子をつかむことに努力していった。

2. 今後の課題

・ 1年生における学級編成の弾力化

弾力化による学級編成は1年生限りで、2年生からは通常の学級編成になってしまうので、新たに児童一人一人に応じたきめ細かな指導を行うための工夫や授業改善が必要となる。

・ 算数科における少人数指導

今年度の取組でそれぞれの学習形態の一長一短を把握できたので、それらを組み合わせたり、さらに児童の実態をみてグループ分けを考えたりするなどの工夫をし、より児童のニーズに合った学習形態を考えていきたい。また、この取組について保護者にさらに理解してもらうために、計画的な授業公開等を行っていきたい。

・ 理科における選択学習

選択学習単元は決まっているので、今年度の実践を反省材料に、さらに児童の興味関心に応じた授業づくりができるようにしていきたい。

・ 6年生における教科担任制

今後も学級担任制のよさを保ちながら、今年度の取組で得た教科担任制のノウハウを生かしていきたい。

学力等把握のための学校としての取組

- ・ 3年生及び5年生における学力テストの実施（国語、算数）
- ・ 算数科全学年、観点「表現処理」における到達度テストの実施
- ・ 国語科全学年、漢字における到達度テストの実施

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・ 3年生 算数科「かくれた数はいくつ」 公開授業（11月5日）
- ・ 6年生 理科「大地のようす（2）大地の変化」 公開授業（12月3日）
- ・ 周南管内学力向上フロンティア事業地区協議会研究発表（1月23日）
- ・ 研究集録の作成及び、管内全学校への配布（3月）

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- | | | | | |
|----------------------|--|--|--|--|
| 【新規校・継続校】 | <input checked="" type="checkbox"/> 15年度からの新規校 | 14年度からの継続校 | | |
| 【学校規模】 | 6学級以下 | 7～12学級 | | |
| | 13～18学級 | <input checked="" type="checkbox"/> 19～24学級 | | |
| | 25学級以上 | | | |
| 【指導体制】 | <input checked="" type="checkbox"/> 少人数指導 | <input checked="" type="checkbox"/> T・Tによる指導 | | |
| | <input checked="" type="checkbox"/> 一部教科担任制 | その他 | | |
| 【研究教科】 | 国語 | 社会 | <input checked="" type="checkbox"/> 算数 | <input checked="" type="checkbox"/> 理科 |
| | 生活 | 音楽 | 図画工作 | 家庭 |
| | 体育 | その他 | | |
| | | | | |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | <input checked="" type="checkbox"/> 有 | 無 | | |